

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	唯一者の歩める道
Author(s)	手島, 通生
Citation	龍南, 180: 16-32
Issue date	1921-12-18
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/7827">http://hdl.handle.net/2298/7827</a>
Right	

# 唯一者の歩める道

手 島 通 生

Kannst du dir selber dein Böses und dein Gutes geben und dein

Willen über dich aufhängen wie ein Gesetz ?

Kannst du dir selber Richter sein und Rächer seines Gesetzes ?

(Zarathustra)

私の言はんとする處を嘗て先哲が更に力強い言葉と透徹せる理論で以て言ひ表してゐるとしても、私の今言はんとしてゐることは少くとも私自身にとつては空にはならぬ。それが眞に私の體驗となつてゐる限り、私の弱い言葉も決して先哲の強い聲で打ち消さるゝことはないだろう。先哲の聲は基音として私の聲を支へてくれる。——そして確かにそれは私のものである。

私は唯私一個の信念の中に於てのみ生きてゐる。この世に於て私が人並に生存を主張せんとするは、或は恐らく單なる偏見に過ぎないかも知れぬ。それ程に私は自らにのみ執してゐる人間である。従つて私が何事にもせよ人の前で語ろうとするのは寧ろ嗤ふべき越權であるかも知れない。併し人は竟にたゞ自らを經驗するのみである。一步もそれ以上に出ることは出来ない。そこで私も茲に自らを語ること敢てする。「自分の

このみを語るといふので人は往々非難せられる。併し、人が最もよく取り扱ひ得る主題は自分のことのみではないか。」とアナトール・フランスは言ふ。

併し乍ら實際私は自らを十分理解してゐるのであるか。抑々私は探究しつゝあるか。

遮莫、何物にも犯されず怖れず純一に自己の道に猛進せんとする者に光榮あれ。私にも一切の福祉の餘剩が來り、私の生存が正當なる理由を與へらるゝ様に、私は自ら私自身の個有の天地を創造せんことを希ふ。

x

——或る友への手紙の原稿から——

(前略) 死といふものが怨靈の様に私の思索に着き纏うて來る様になつてから既に四年を経過した。而もまだ如何ともすることが出来ない。先達て殆ど絶望に瀕した大患に悩んだ時、私の頭の中には死の痛苦を通してあくまで生を肯定しなければならぬといふ觀念が閃いてゐた。併し乍らその實私の苦み悩んだところはまだ遙かに低い肉体上のことに過ぎなかつた。苦しさのあまり、或は死ぬかも知れぬと思つて遺言を手帳に書きつけたり等したことがあつたが、それは死の超越ではなくて、死に對する恐怖と生に對する執着に外ならなかつた。

絶えず私は苦み迷うてゐる。そして終に何等の解明の曙光も見出されない時、折々私は私の苦みとするところが、或は自分の價值以上に出てゐるのではないだろうかと思配することがある。一寸時おかしい話だが即ち私に死の問題、生の問題、ひつくるめて自己の問題を考へる資格が果してあるだろうかと思へることが

あるのである。自分も他の人間と同様、そして恐らくは禽獸と同様、自分の入つてゐる世界から決して脱出し得ないものだと思ふに定めて、自分から判じても實に果敢ないもの、價值のないものに一生を捧げて肯て悔いない連中と、結局の所同じではないかと考へるのである。

幼い時分のことから回想して見ると、私は確に常人とは異つた苦みを持つてゐた。或る時は感情の餘りに纖弱な爲に、自分は女子に生るべき筈だつたのが誤つて男になつたんだ等と思つたりしたことがあつた。併し私の幼時は、たゞ何とはなしに自己の纖弱に屈從してしまつてゐたのである。自分は弱いものだ、自分は命せられ與へられたまゝに動くことより外は何うすることも出来ないものだ、と簡単に決めてしまつて、それ以上に自ら開發し自ら建造して行くところの何等の努力もなさなかつたのである。併し聽て私の内には大きな破綻が生ぜねばならなかつた。即ち私の素質の内には、思ひがけなくも激烈な破壊性、叛逆性が宿つてゐたからである。聽てこの破壊性叛逆性が自己の弱小と激しい戦を始めた。安逸なる迷妄に向つて猛烈な攻撃を始めた。この戦が至る所外界に表れる。私の行動として表はれるのは多くこの戦の結果である。だからして、人は私を常に一個の手島主義で行く人間だと見た。併し實際に於て私の本質はずつと異つた、矛盾と困亂とに充ちた混沌たる存在であつたのである。勿論今尙然りである。

私は此の如き自己を省る時、ふとそれでは自分も死の問題、生の問題、永遠の問題に參する資格を持つてゐるのだと考へる様になる。人が問題としないことをも問題とし、人が苦まずに通る所を自分は苦んで通る様に作られてゐるのだと考へるからである。

併しまだ／＼私の生活内容は空乏を極めてゐる。私は自分を省る毎に、幾度此の如き空虚な生活を一刻も

早く葬り去らねばならぬと考へたか分らない。そしてそれが殆ど毎日の様に起つて來るのである。「自分は今日から全然生活を一新するのだ」と何百邊何千邊叫んだか分らない。而もかくして過した瞬間が、悉く唾棄すべく嘲笑すべきものである。

私の混沌は何時まで續くか分らぬ。一生かく混沌たるものであるとすれば、私は終に「自己」なる語を使用することの出来ない或物であらう。併し、私の一生を通じたる存在を、手島通生なる名稱で表はすとすると、手島通生なるものの内容は、現在の私の内容とは全く別物であるだらう。それだけ私は未來を信じてゐるのである。

死の問題から飛んで私なるものゝ解剖になつてしまつた。併し乍ら、それは何れも引き離すことの出来ない問題なんだろう。死の超越は單に議論ではなくして、自己に於て直接なる必要である。自己を愛惜するが故に死を考へる。併し、死を考へることか結果として、自己の最大の愛惜、生の肯定であるか何うかは私には分らぬ。若し生の肯定、而も死の痛苦と闘つて勝ち得たる強烈なる肯定に至り得るならば、死の問題を考へることは自己の最大の愛惜に相違ないだらう。「さらば人々死を考へよ。死を考ふるは即ち人生の目的を考ふるなり。如何して生くべきかの問題は即ち如何して死すべきかの問題なり。死を考ふるは死滅を考ふるに非ずして永生を考ふるなり。」と樽牛が言つてゐる。此の「人々」とは一体誰達であるかと私は考へる。群集に向つて假にこの言を提出したとすると、果して幾人がこの「人々」に相當するだらうか。此の提議に堪へ得る者は天才のみであると私は思ふ。普通の人間には死は殆ど問題にならないのである。彼等には生に對する自覺すらないので。——又それだけ健康體だとは言へるのだらうが。死を考へる者、生を自覺せる者はこ

の意味で皆病人だろう。狂者だろう。恐らく釋迦でも、キリストでも、カントでも、シヨペンハウエルでも。併し、その狂者や病人の御蔭で人類が破滅から救はれてゐることは又不思議な事實である。私も人の問題としない死や生に就いてばかり考へてゐるといふことに於ては、狂者の仲間であるかも知れない。

「考へずに生きて行け。」或人は簡單にこう教へてくれる。併し乍らこのことはそう容易に片着く性質の問題ではない。自己の内に漲る混沌を自認する私は、どうしても考へざるを得なくなる。

何だか分らぬことを書き立てた。この分らぬ感想と私なる者が同一であるとも言へるし、又全く別物だとも言へるだろう。そして兩方とも眞個である。(下略)

x

風は海を越えて廣野の樹を吹く。併し風は再び樹を想ふことはない。彼は更にあてもなく、野より丘、丘より森へ、歸ることなく永遠の空間をひた走りに走つて、或は木の葉を捲き砂を蹴る。而も彼は永遠に吹きつゝ永遠に一所に執することを知らない。

自己といふものが私の唯一の關心事となつてから、私の心理は恰もこの風の如きものであつた。思索のあらゆる領域を轉變し猛進しつゝ、終にその安靜する所を見出さない。

唯、私は私の経過し來れる所に一條の血に塗れた小路を残してゐる。そして私は私の行くべき方向を知つてゐる。そのみを私は自ら單なる風たるよりも勝れりとする。

前に掲げた私の感想から、私の行きつゝある方向は、漠然としてゐるはあるが明かにされてゐるだろうと思

ふ。希くば私をして更にその血塗れの小逕に就いて語らしめよ。

x

自己に對して忠實であればある程この世は決して生き易くはない。それは一個のまことに奇なる眞理である。

「抑々生命とは何ぞや。何故に我々は生きなければならないか。」この疑問は人間が生存してこの方常に繰返へされてゐる最も陳腐な問題なるにも係らず、而も永遠に新しい必要である。古往今來幾百の哲學者、宗教家、思想家がこの疑問の爲に到頭その大事な問題の一生を棒に振つてしまつた。そしてそれは恐らく私も到底脱れることの出来ない運命であらう。

「あれは汝呪はれたる者哲人よ。何を考へ込んでゐるのだ。」と或人は教説する。「お前の眼は未だ見ぬ世界の悠久の悲みをのみ餘りに多く見てゐるのである。お前の智慧を捨てよ。目を閉ぢよ。お前は自ら賢いと思つてゐるのか。お前ほど愚な者臆病な者がどこにあらう。人生はたゞ考ふる爲、たゞ批判する爲のものではない。のみならず人間といふものは何も知ることが出来ないものだ。よしんば何事かを知り得たとするも、それはほんの皮相の事に過ぎない。兎も角も生くることだ。たゞ生活することによつて、生活の刹那刹那を實感して行くのみである。知るといふことは何の價值も必要もない。たゞ實感するところに生命があり生活があるのみである。實に生活こそ人生の總てである。生活のない所には運命もない時もない。唯生きよ。若い男女とともに華かに舞へ。そこに生存の十分なる價值は存するのである。」

恐らくそれも確かに眞理であろう。併し乍ら、その後から直ぐに「何の爲に」と問はざるを得なくなるのが私等の本性ではないか。抑々私等は過去の生活に對する悔恨と、未來の生活に對する憧憬と、現在に於ける不滿とを有せないか。目的もなく方法もなく、唯生を漁り廻る様なやり方は、少くとも私にとつては餘りに生温るくもごかしくて到底堪へられないのである。

「人生は薔薇の花を以て撒き散らされる通路ではない。それは凡庸なる心靈に降らない人々の日々の戦闘である。」とロマン・ローランは言ふ。「世界は乾草の束である。そして人間はそれを挽く驢馬だ。」とバイロンは歎する。少し鋭い眼を以て眺むるならば、何人にも、この世界は一面に於てはたゞ涙の世界、苦みの世界であることが分るに違ひない。實に運命の前にはたゞ泣くことのみが許され、又可能なる唯一のものであることがあるのである。

空乏なる不徹底なる生活に甘んじ得るなら兎も角も、我々が自己の不安を恐れる限り、我々が眞に自己の愛惜する限り、我々が進化に對する喝仰を有する限り、生存の疑惑といふものは常に痛ましい必要である。

x

綿々として盡きざる疑惑に驅られて、或る人は終に自己の存在をすら信することが出来なくなつた。併し乍ら自己の生存してゐるといふことだけは決して疑ふことの出来ない事實である。Cogito ergo sum と叫ぶまでもなく、それは内部からの直觀に直に顯れる事實である。併し、一度それが「何故に」、或は「何の爲に」の問題となつて來ると皆目分らぬ。而もそれが私の知りたい、否、どうしても知らなければならぬ唯



一の大問題ではないか。

×

思へば私が此の如き疑惑に驅られて的もない暗中模索を始めてから、既に長い年月を経過した。私が何んな動機で、又何時からそんな事を思ひ煩ふ様になつたかといふことに就ては、今明かに摘發することは出来ない。併し乍ら、私は恐らく生得概念として、此の如き懷疑に對する萌芽を有してゐたのである。小さい時から、私は、全身に満ち渡る歡樂と愛情とも係らず、よく獨りではんやり考へに沈んでは親達を心配させたものである。丁度小學校の五年生位の時であつた。藤村操といふ學生が、「人生は永久に不可解だ。生きて甲斐なく死して跡なし。」とか言つて、華嚴の瀧に飛び込んで死んだといふことを、その時の受持の若い先生が異常な感激を以て語り聞かした、そしてそれを又私が素派らしい情熱を以て深く心に刻みこんだことを明かに回想することが出来る。それやこれやの事件が益々私のこの傾向を助長する。そして聽て中學校に通ふ様になつた時、突然、人生に於ける最も痛ましい、恐怖と寂寥とに充ちた悲哀に曝さなければならぬ或運命を享くるに及んで、終に動かすべからざる「生存の疑惑」として判然と現はれる様になつたのである。

毎日私はとりとめもない考へに沈む。そして何か或る解明のヒントを得んが爲に、又はかくして考へ抜いたことを系立てて纏めんが爲に讀書する。即ち、既にその頃から哲學といふものが私の生活から一日も離すことの出来ない必要となつてゐた。

私は私の生活方法が好いものであるかどうかは知らない。併し兎も角も何か或る確固たる實在の上に自己

の生存の意義を定立しなければ、到底安んずることの出来ないのは私の性分である。私の内心は困惑と波亂とで絶えず動搖する。不確實程私を苦めるものはない。そこで私は確實なる生存の事實に就いての認識を得んが爲に目茶苦茶に焦慮するのである。内心の安定を求めんとすることは、どうしても捨てることの出来ない私の衷心の欣求なのである。

x

宗教に哲學に、この「生存の疑惑」といふ唯一つの問題を解決せんが爲に、私は懸命になつて没頭して行つた。併し、悲しい哉、私は如何なる教儀にも如何なる教説にも、終に十分満足なる解答を見出すことは出来なかつたのである。「自我とは何ぞや生命とは何ぞや。」這般の問題に就いて論議した著述は非常に多い。そして何れも皆見事この大問題について明快なる解決を與へてゐる様に見ゆる。併し乍ら、實際に於て、此の如き問題が單に概念的に理論的に説明せられたとしても、抑々それが何程の價值を有するだろう。實在の内奥には到底思考の及ぶことの出来ない深みがある。情意の本質には到底智力の衝き刺すことの出来ない根柢がある。希くば私には具体的に端的に生そのものの内容が示されることが必要だ。直接なる生活の指針が與へらるゝことが必要だ。私は單に概念の堆積や整齊ではなくして、直接なる内的經驗の表白を渴望する。それは決して單なる理論ではなくして、切實なる内部からの要求である。

一体どうしたらいいのだろう。私は未だ運命を愛する道を知らない。甘い憂鬱と微笑める懷疑とに包まれる享樂に走るが如きは思ひもよらぬことである。彼の主義の青年の様に安價なる感激によつて自己を肯定

し、頽廢せる道徳家の様に安價なる斷言的命令によつて生活を肯定し、迷妄せる宗教家の様に安價なる天國によつて現世を肯定するが如きことは、到底私の堪ふことの出来ない事である。嗚呼、若し私にしてデカルトやスピノーザの様に、この世を神の發現である等と眞面目に信奉することが出来る程敬虔(?)な氣分に生れついてゐたならば……。メエテルリンクやエルハアレンの様に、神秘を通して實在に到達する道を知つてゐるならば……。恐らく私は餘りに異端的な現實的な性向を保有してゐるのである。

考ふれば考ふる程分らなくなる。何をしたらいいか皆目分らぬ。何をやりかけてもそれが明に自己に於て正當なる生活だといふことが証せらるゝ迄は、どうしても不安で仕方がない。

生來私は到底妥協といふことの出来ない人間だ。何事だろうが決して中途半端に終ふことの出来ない性分を持つてゐる。従つて私のこの焦慮も人一倍の激烈さを加へなければならぬのである。私の氣質の徹さは自身の問題に就いては尙のこと例外を作らない。私の心の中の紛亂は、まるでオーストラリアの叢林だ全く動きの出来ない程切端詰つてゐる。

涯しなき混沌だ。暗黒だ。晦冥だ。もう私の前には一切の善美なる物、光明に圍繞せられた物は悉く匿されてしまつて、唯痛ましい苦慘のみが灰色の霧に包まれて殘されてゐるのみである。今や生存に對する疑惑は漸く呪咀に變らんとする。

x

「嗚呼生命は限りなく重い。生くることは堪まらなく苦しい。」——到底解決のつかぬ疑惑の爲に壓されて

終にこの忌はしい呻きをへ發しなければならぬ破目に陥つてしまつた時……………。

“People only take refuge in invective when they run short of proofs” と言つたデイデロの言葉が、私の上にも適確に當嵌る。……如何に強く自ら持せんとするも、忌はしい呪はしい欲望は犇々と肢体の内に充満し來り、あらゆる不平は脈管の中に渦巻き燃れて、……嗚呼、自分の生存の何處に望ましく願はしいところがあるか。抑々人生そのものが暗黒な、醜い、不合理なものに過ぎないのではないか。“人間は唯盲目的衝動によつてのみ動く一個の機械である。”意欲といふ様なものが自分に存することが寧ろ呪はしく悲しい。

一つの反自然は決まつて第二の反自然を強ふる。この時初めて私は「死」といふものを明瞭に意識した。

Count o'er the joys thine hours have seen,

Count o'er thy days from anguish free,

And know, whatever thou hast been,

'Tis something better not to be. — (Byron)

丁度その頃から、私がシヨベンハウエルの哲學に心惹かれる様になつたのは決して偶然ではない。彼は私の嘗て知つた中の、最も天才的な直覺的眼光の所有者である。一切經驗の内奥の本質に對する直接なる洞見の下に、最も端的に切實に人生の裏面を切り開いた哲學者である。彼の哲學の中心には冷索にして醜惡なる苦慘に満ちた現實が渦巻いてゐる。彼に於て初めて私は今迄どうしても求むることの出来なかつた眞の哲學者を發見し得た——様な氣がした——のであつた。

シヨベンハウエルの所説によつて、私の厭世的な氣分は恐ろしい根據を與へられた。存在は幾轉變する、而

も思慮ある目的はない。人生の根底、存在の原理は、一個盲目にして制止すべからざる衝動……。私は彼の説くところの解脱論については必しも正當な理解を持つことは出来なかつた。併し兎も角も一刻も早く此の如く惱ましい存在から免れねばならぬ。そこで聽て私は自殺（それをシヨペンハウエルは決して眞の解脱への道ではないと説いてゐるけれども）を考へる様になつた。

嗚呼死よ。それは今初めて私を執へたる最も重大なる問題である。

嗚呼死よ。一切の意欲を廢し評價を廢し創造を廢するかの大いなる安息の時よ。我が生に何の執着に價する内容があるか。全心を擧げて追求すべき目標も、全身を抛つて愛着すべき對象も、全存在を震憾すべき歡喜も悲痛も最早自分にとつては全然虛妄である。自分は唯一刻も早く此の如く無意義な生存を滅却しなければならぬ。

……生の嫌惡と死の仰望とが私をしてあらゆる破裂に、あらゆる兇暴、あらゆる咎むべき行爲に走らした私はもういよ／＼いけなくなつた。「死後は如何」といふ問題は、その時、まるで私の關心事の中に無い。

x

生涯に於て又とあるまじき危險に面して私は立つてゐる。没落と飛躍との際疾い別目に私は立つてゐる。白刃をじつと握つてその切先を見詰めた時。あゝその瞬間に於ける言ひ難き内心の混亂。而も尙……而も尙死ぬことは私にとつて餘りに恐ろしかつた。

私はあまりに臆病であるのかもしれない。私はあまりに未練がましいのかも知れない私の内心にまだ／＼

大きな隙のあるのかもしれない。併し兎も角も死といふものゝ内容が、私にとつて全然フレムドなるが故に……。

x

こゝに初めて私は眞正なる生存の問題に逢着したのである。今迄漠然と疑を挿んでゐたことが、理窟ではなしに實際上に於ける直接なる必要として私の上に差し迫つて來た。如何して生くべきかの問題ととも、如何して死すべきか（或は如何して死に堪ふべきか）の問題が私の最も重大なる關心事となつて來た。

併し乍ら、尙生きて行くことは堪まらなく苦しい。だからと言つて最早昔の様な單純な厭世觀に歸することは絶対に出來ない。然らばこの問題を如何に處理すべきであるか。

「個体に於ける生死といふものは元より一個の現象に過ぎない。それは唯個体の認識に於てのみ存することであつて、存在の根本原理に於ては何の關する所でもない。」とシヨペンハエルは説明する。併し乍らその説明だけは出來たにしても、私の本質に深く纏り着いた死の恐怖や生の痛苦といふものが少しでも減少するわけではない。而のみならず私はこの一個の自己を離れて決して眞正なる存在を考へることは出來ないのである。

どうしたらいいか皆自分らぬ。生きて行くことは苦しい、而も死は餘りに恐ろしい。眞に自己を愛惜する人が早晚一度は逢着すべきこのデレンマの上に立つて、私は全く手も足も出ぬことになつてしまつた。同じ問題に於ける昔と全然異つた氣持で矢も盾も堪まらぬ焦躁が再び私を襲ふた。

實にも悲惨に瘦せ衰へ飢ゑ果てたる私の魂よ。實在の諸物は最早全く私の知識中に亡失してしまつた。燒きつく様な渴きが私を執へた。肯定することも出來ず否定することも出來ぬ重い生命を擔つて、私はまるで魂を撃ち抜かれた狐の様にふら／＼と彷徨ひ歩くのみである。

あはれ再び私の危機。實に私を救ふべき助けの手はないか。

x

長い間の亂脈の後に漸く私の上に救ひの曙光が輝いて來た。深淵の岸壁の頂上に立つて一步も進退することの出來ない破目に立ち到つた時、初めて人はよく飛躍し得るものである。「私が厭世觀を克服し得たのは私の生活力の最も沈衰してゐる時であつた」とニイチエの語つてゐることを、私も直接に自ら體驗することが出來た。(それを一々述べたてゝることは出來ない。眞の體驗は決して理論の通りには行かぬ超絶的のものであるから)。殆ど絶望に瀕せる疾患の中に於て、尙且強烈なる生に對する渴仰が燃えてゐたのである。

一切の痛苦を通して人生を肯定しなければならぬ。それは決して空論ではなくして私の痛切なる實感だ。

Wearied of Seeking had I grown,

So taught myself the way to Find:

Back by the storm I once was blown,

But follow now, where drives the wind.

——(Nietzsche)

兎も角も私は生きなければならぬ。運命の命するがまゝに。

劫初この方無限に進展して止まぬ宇宙の萬象。人類發生以來幾十萬年、歴史有つて以來四千年、その間に於ける目覺ましき文化の發展。私はそこに決して否定することの出来ない美と權力とに満ちた或物を認めないわけには行かないのである。

抑々苦痛なるが故にといふことは、決して人生否定の理由にはならない。何人もほんとうにこれこそ眞の禍難だといふ禍難を、これこそ眞の苦惱だといふ苦惱を経験することが出来るだらうか。何人も過去に於ける不幸だつたと思ふことを回想して見る時、その不幸について多少なりとも警告と力とを受けなかつたものがあるだらうか。

人生は快樂を受くべき贈物ではないが故に拋棄せられねばならぬ。快樂を求めても得られないが故に否定せられねばならぬ。そんな理由はない。總ての厭世觀なるものは皆此の如く享樂の可能に對する不滿から起つてゐるのである。實にそれは人生に對して自己に對して最も大いなる褻瀆だ。

苦惱を探求し悲憂を含味することこそ最も有効に我々自身を探求することである。蓋し我々自身の有する價值或は力は、我々の悲憂と苦痛との集積せる價值に過ぎないと言つても差支へない位であるからである。

人生は不斷の進化、自己向上、克服、昂昇、上進の過程である。快樂は決して行爲の目的ではない。

ベスピアスの山腹に汝の住家を構へよ。未踏の海の汝は船を乗り出せよ。汝等認識の人よ。臆病なる牝鹿の如く、森の中に隠れて安逸の夢を貪ることが、汝等にとりて満足であり得た様な時代はも早過ぎ去るであらう。



我々は日々の生活に於て一寸の油斷もなく、確實に一步一步を踏みしめて行かねばならぬ。總て一度び生起せることは悉く神聖である。それには必然に十分の根據と理由とがある。如何なる怨恨も、呪咀も、悔みも、嘆きもこれを瀆すことは出来ない。我等の踏み行く刻一刻はそのまゝ、我が内に溶け込んで、我等の上に永劫の係りを持つ。我等は當にあらゆる瞬間に於て、熾烈なる自己意識と、十分に於て且つ正當なる行爲の辯明とを持つてゐなければならぬ。

「遇然」の餘りに激しき脅威にわなゝゝ者は、尙自己に對して不忠實なるが故である。

我々は常にあらゆる事象を通して運命に面接し、一切の對立を征服してそれを自己の内に融解せしめ、自己を無限にまで擴張せんとする努力を持たなければならぬ。その時自己は運命と合一し、何物によつても揺がされない力強い平靜に入るのである。

あらゆる瞬間が自分の内に永久の價值を持つ——苦惱さへも。我々の行爲と存在の總ては無限に重大である。Anor fai 運命を絶對に愛せよ。こゝに偉大なる肯定の曙光は来る。

死に憧憬るゝ者も死を怖るゝ者も、未だ嘗て最もよく生くることを爲さなかつた者である。あらゆる瞬間を緊張し切つた意志に於て生くる人、即ち總ての刹那を最もよく生き、そして總ての過去を最もよく葬る處の人に抑々何等の死があろう。あらゆる瞬間を充實し切つた生活に生きつゝある處の人は、實にそのまゝ生命の核實であり、眞理そのものである。現實の呼吸を引き取る刹那に於てすら尙潑潑たる生の躍動がある筈である。空乏なるもの虚妄なるものに貴い生命を奉仕するが故に、その誤謬と昏迷とより恐怖は来る。

人世は決して歡樂の巷ではない。眞に自己に忠實であればある程決して生き易くはない。然し乍らその生

き難い中を、あくまで苦痛と戦ひつゝ生きて行くところに、潑刺たる自己の高揚があるのである。宇宙に瀰浸する一切の苦痛よ我に來れ。我は悉くそれを破碎し撃滅するであらう。

私は私の偉大の道を行く。私は常に内界に沈潜し、主觀の自律を高調して、そこに最高の權威と價值とを有するものを求めんことを希ふ。

x

汝は汝自らの焰に於て燒かるゝことを欲はざるべからず。汝若し初めに先づ灰燼となることなくば、如何ぞよく新しくなるを得ん。

(十二月三日起——同十日了)